

MEJ 4069

国語問題問答

第3集

国語シリーズ 26

文 部 省

国語問題問答第3集

正 誤

ページ	行	誤	正
3	下から4	35年は	35年 は に
12	4	豆 豉	豆 豉
12	5	中	中 坪
3	下から11以下	(活字の組み方)	(各行1字ずつ左へあ げる。「国語問題 要領」の抜き書 きは、その上の「行 だけである。)

刊 行 の 趣 旨

国語シリーズは、国語の改善と国語教育の振興に関する施策を普及徹底するために編集するものであります。

このシリーズは、国語問題編、国語教育編、国語生活編、国語教養編および資料編に分け、問題編は主として国語審議会が発表した事がらを、教育編は国語学習指導の方法などを、生活編は国民の言語生活に関する事がらを解説するものであり、教養編は一般の国語教養を高めることを、資料編は国語の改善と国語教育の振興に関する基礎的資料を集録することを目的としたものであります。

すでに、問題編および教育編はそれぞれ6冊、生活編および、教養編はそれぞれ5冊、資料編は3冊を刊行しましたが、各編にわたっておいおいに刊行する予定であります。

国語課では、昭和22年以来、国語政策について、広く各方面から寄せられた質問に対して、そのつどお答えしてきました。それに基づいて、問題編の1冊として昭和28年に「国語問題問答」を、29年に「同問答第2集」を刊行しましたが、こんど、第3集として、この小冊子を編集しました。なお、このたびは、付録として、昭和25年6月審議会決定の「国語問題要領」同じく昭和27年4月国語審議会決定の「これからの敬語」を添えました。

昭和30年2月

文部省調査局国語課長

白 石 大 二

目 次

第1部 質 疑 応 答 1

- 1 国語問題一般について..... 3
- 2 当用漢字について..... 5
- 3 人名用漢字について..... 9
- 4 地名の漢字について.....10
- 5 学術用語の整理について.....13
- 6 公文用語の改善について.....15
- 7 新字体について.....24
- 8 筆順について.....29
- 9 現代かなづかいについて.....30
- 10 表記法上の諸問題.....32
- 11 標準語の問題.....35
- 12 敬語の問題.....38
- 13 ローマ字の問題.....39

第2部 資 料（付録）43

- 第1 国語問題要領（国語審議会）45
- 第2 これからの敬語（国語審議会）59

第1部 質 疑 応 答

1 国語問題一般について

【問】 国語問題の由来と、その解決について、現在、どんな努力が払われていますか。

【答】 国語問題のおこった原因について、もっとも簡単に要領よく説いているものは、昭和 25 年 6 月に、国語審議会から発表された「国語問題要領」の中の次の 1 節です。それを次に書き抜いてみましょう。

わが国は、古来、諸外国の文化を摂取してきたが、それに伴って、日本語とは系統のちがった言語・文字に接する機会が多かった。そして、古くは中国、近くはヨーロッパ・アメリカなどの言語・文字を採りいれた結果、ついに今日の複雑多様な国語が形成された。こうして国語問題は、わが国の文化政策として、どうしても避けることのできない重大問題になってきたのである。

そこで、この複雑多様な国語・国字を改善して、これを簡明で平易なものにすることは、わたしたちの社会生活の能率をあげ、国民文化の水準を高めるうえに、ぜひとも必要な基本的条件です。

このことは、つとに先覚者の唱導するところであって、それゆえに、明治以来、いろいろな運動や事業がおこりましたが、文部省としては、その根本的な解決をはかるために、まず学術的な調査からはじめることとして、明治 35 年は国語調査委員会を設けました。それが、大正 10 年には臨時国語調査会となり次に昭和 9 年からは国語審議会となりましたが、さらに昭和 24 年からは、これまで文部大臣の諮問に応じることを主として

いた国語審議会を、新たに民主的・自主的に国語政策を立案審議する機関としての国語審議会とし、一面、国立国語研究所を新設して、その研究の成果と相まって国語問題の解決に努力する態勢を整えています。

調査局国語課は、国語審議会に対して事務的、技術的の援助をすると同時に、広く国語の改良について調査、企画し、政府機関、教育機関その他に対して、その普及を図ること、その他の仕事を行っています。

【問】 国語白書を読みたいのですが、どこで発表されていますか。

【答】 さきに文部省でも印刷・配付し、後に、国語審議会委員中島健蔵氏の解説をつけて、国語シリーズ4「国語問題要領解説」として発行していますが、なお念のために、この本の第2部に付録しておきました。

御覧のとおり「国語審議会の性格」以下「国語問題審議の基準」の5章から成っていますが、その「審議の基準」として

- (1) 義務教育を容易にすることができるかどうか。
- (2) 一般の言語生活、特に文字の使用と理解とを能率化することができるかどうか。
- (3) 公衆に対する言語として適用できるかどうか。
- (4) 文化を創造したり受けついたりするのに、どんな影響を与えるか。

という4項をあげていることは、注目して読んでよいと思われるところであります。

2 当用漢字について

当用漢字表の補正について

【問】 当用漢字が改正されたそうですが、その内容と、正式な官報告示の日をお知らせください。またその改正の趣旨を説明してください。

【答】 当用漢字表が昭和 21 年 11 月に内閣告示として公布されてから、すでに数年を経ましたので、その間の実行上の経験にかんがみ、国語審議会では、新しい委員から成る漢字部会にかけて審議しましたところ、その結果、次に掲げるような発表となりました。

「当用漢字表審議報告」について

国 語 審 議 会

このたび、漢字部会から当用漢字表に対する再検討の結果が報告された。これは、漢字部会が、当用漢字表を中心として広く社会に日常使用される漢字について2か年間 26 回にわたり熱心に審議した結果であって、将来当用漢字表の補正を決定するさいの基本的な資料となるものである。

思うに、当用漢字表の補正は、その影響する方面や範囲が広く深いので、この漢字部会の補正資料は、このさい一般の批判をもとめ、今後なお実践を重ねることによって、その実用性と適正さが明らかにされると考えられる。

この漢字部会の非常な努力によって、当用漢字表が全体的に

妥当なこともわかった。この点についても同部会の労を多し
たい。

当用漢字表審議報告

(漢字部会)

1 当用漢字表（音訓表・字体表を含む）から削る字

且	丹	但	効	又	唐	嚇
堪	奴	寡	悅	朕	濫	煩
爵	璽	箇	罷	脹	虞	謁
迅	遞	遵	鍊	附	隸	頒

2 当用漢字表（音訓表・字体表を含む）に加える字

亭 ^{テイ}	俸 ^{ホウ}	偵 ^{テイ}	僕 ^{ボク}	厄 ^{ヤク}	堀 ^{ほり}
壤 ^{ジョウ}	宵 ^{ショウ}	尚 ^{ショウ}	戾 ^{もどす}	披 ^ヒ	挑 ^{チョウ}
据 ^{すえる}	朴 ^{ボク}	杉 ^{すぎ}	棧 ^{サン}	殼 ^{カク}	汁 ^{ジュウ}
泥 ^{デイ}	洪 ^{コウ}	涯 ^{ガイ}	渦 ^{カウ}	溪 ^{ケイ}	矯 ^{キョウ}
酌 ^{シャク}	釣 ^{つり}	齊 ^{セイ}	竜 ^{リュウ}		

3 音訓を加える字，字体を改め音訓を加える字

個^コ → 個^{コ・カ} 燈^{トウ} → 灯^{トウ}

上のようなわけで、こんどの発表は将来の補正に備えて、その資料を一般の批判にうったえ、かつ新聞紙上で実験してみるだけの案なのですから、現在の当用漢字表の内容や法令および教育の上での取扱には少しも関係のないものです。が、これについて若干誤解の

むきもあるので、念のため次のような調査局長の通知が出されました。

文 調 国 第 9 3 号
昭和 29 年 3 月 20 日

各省庁文書（総務）課長
文部省内各局課長
各国立学校長
各都道府県知事
各都道府県教育委員会教育長

殿

文 部 省 調 査 局 長

小 林 行 雄

当用漢字表の補正資料について
(通 知)

このたび、国語審議会では、当用漢字表の再検討の結果について、別紙のように決定しました。ただし、当用漢字表の内容や法令および教育の上でのその取扱は、これによって別に変更されません。誤解のむきもあるので、念のためお知らせします。

動植物を表わす漢字について

【問】 当用漢字表の「まえがき」に、動植物の名はなるべくかなで書くといっているのに、なぜ「牛」や「馬」などがあるのですか。

【答】 動植物のうち「牛」「馬」などは、漢語熟字として用いられることが多いので、それを考慮して残されたものです。

動物の教科書では「うし」「うま」と書くのがたてまえです。

当用漢字表にある動物の名の字

犬 牛 馬 豚 羊 象 蚕 鯨

当用漢字表にある植物の名の字

菊 松 柳 桃 梅 桜 桑 竹 茶

私 書 箱

【問】 「私書函」の「函」が当用漢字表にありません。これからは「かん」と書くのですか。

【答】 「私書函」は、当用漢字表によって「私書箱」と改められました。公式な名称は、郵便法第 50 条に「郵便私書箱」とあります。

あ て 字

【問】 あて字はなるべくやめたいのに、なかなかそのあとを絶ちません。

「自分」「仮名」「勝手」などもあて字であると思いますがどうですか。

【答】 あて字の中でも、それがあまり無理でなく、かつ広く世間で使いなれてきたものは、そのまま今日でも使われているものがあります。たとえば

見舞 仕事 世話をする

ただし、これらもおいおいにかなで書くことが多くなってきました。作文などは、なるべくあて字を書かないことにしたいと思います。

自分の分は自己の分ということから、自己、自身のことを表わすようになったのであって、あて字ではありません。

「仮名」「勝手」などは、かながきがよいと思います。

3 人名用漢字について

人名用漢字の数

【問】 人名用の漢字は、どうして特別にできたのですか。またその数はいくつありますか。

【答】 人名の特殊性にかんがみて、当用漢字以外に、今日、なお実際に多く用いられている漢字 92 字を国語審議会で選定し、それを政府に建議したのが採択されて、昭和 26 年 5 月、人名用漢字別表として公布されました。その結果、戸籍法施行規則も一部改正されて、こどもの名まえに使ってよい漢字は当用漢字表の 1850 字と、この別表の 92 字とになりました。あわせて 1942 字の中から自由に選んでよいわけであります。

その読み方も自由ですが、なるべく、だれにもあまり無理なく読むことができるような読み方にするのが好ましいわけです。

人名用漢字別表

昭和26年5月25日
内閣告示第1号

丑	丞	乃	之	也	互	亥	亦	亨	亮	仙	伊
匡	卯	只	吾	呂	哉	嘉	圭	奈	宏	寅	尚
巖	巳	庄	弘	弥	彦	悌	敦	昌	晃	晋	智
暢	朋	杉	桂	桐	楠	橘	欣	欽	毅	浩	淳
熊	爾	猪	玲	琢	瑞	甚	睦	磨	磯	祐	祿

禎	稔	穰	綾	惣	聡	肇	胤	艶	蔦	藤	蘭
虎	蝶	輔	辰	郁	酉	錦	鎌	靖	須	馨	駒
鯉	鯛	鶴	鹿	麿	齊	龍	龜				

人名用漢字の字体

【問】 こどもの名前に「真弓」とつけましたが、役場に備えつけてある字典には「眞」とあります。教科書には「真」とありますから、将来の教育上、それで届けたいのですが、どうでしょうか。

【答】 昭和 24 年 4 月 28 日官報付録所載の「当用漢字字体表」によって、これからは真を正字としてつかうことになりました。教科書に「真」としているのは、その新しい字体によったのであります。また、戸籍上にも、とうぜん「真」で届けられます。

「眞」は、これからは旧字体ということになります。さればとて旧字体でも受けられることになっています。ただし、お説のように、教育上、これからは新字体で届けることが好ましいことでもあります。

次に「真」のつく当用漢字をあげておきます。

真	慎	鎮
---	---	---

4 地名の漢字について

むずかしい地名

【問】 地名の漢字は自由ですか。ずいぶんむずかしい漢字や、むずかしい読み方がありますが。

【答】 今日のところ、地名の漢字については何等の制限がありません。しかし、それも昔からのものはいたし方がないとして、これから新しくつけるものは、なるべく当用漢字表以内の字でまかなうようにというのが、その決定当時からの希望でありました。そこで昭和 27 年度からはじまった全国市町村の合併事業に際しては、とくに国語審議会から総理大臣にその趣旨のことを「町村の合併によって新しくつけられる地名の書き表わし方について」として建議しました。これが地方自治庁によって関係方面に伝達・説明されて、新しい市町村名を決定するにあたってしだいに考慮されています。その全文を次に掲げておきます。

町村の合併によって新しくつけられる
地名の書き表わし方について

(内閣総理大臣あて建議)

政府では、こんど全国の町村の合併を促進されることになったと承っています。ついては、この機会に、別紙の趣旨をお含みのうえ、合併後の市町村名の書き表わし方が、できるだけわかりやすく、読みちがいの起らないようなものに決定されるよう、適当な処置をとられることを希望いたします。

地名の漢字については、国民生活一般に影響するところが大きいので、当用漢字表選定の際にもいちおう問題となりましたが、法規その他の関係上その解決は後日に見送られることになって今日に至りました。しかし、すでに当時から 7 年を経過した現在、当用漢字表制定の趣旨も広く一般に理解されるようになってきました。ちょうどこのとき町村の合併が行われるということは、地名の文字をわかりやすいものにするうえに、またとないよい機会であると思います。よって、ここに建議いたし

ます。

(別紙)

1 むずかしい漢字が用いられている例

長崎県の豆殿（ツツ）村， 鹿児島県の穎娃（エイ）町
宮城県の中 （ナカゾネ）村， 石川県の羽咋（ハクイ）村
山梨県の櫛原（ユズリハラ）村， 岡山県の砦部（アザイ）町

2 文字はやさしくても、読み方のむずかしい例

和歌山県の学文路（カムロ）村， 愛知県の拳母（コロモ）市
京都府の間人（タイザ）町， 茨城県の行方（ナメカタ）村
ことに北海道にはこの種の地名が多い。

神戸は 兵庫県ではコウベ， 三重県ではカンベ
鳥取県ではカンド， 岡山県ではジンゴ
東京都ではカノト，

そのほかコウトとかゴウドと読む地名が各地にある。

3 地名の書き方を平易にした例

長野県「茅野町」は「ちの町」とかな書きにした。東京都では区を合併した際「飛鳥区」「春日区」などの案を退けて、「北区」「文京区」とした。

4 教育上

むずかしい漢字，むずかしい読み方の地名は，むかしから学習上非常な負担となっていたが，今後も，教育上大きな不便を感じる。

5 通信・ラジオ・交通・事務上

地名のむずかしさは，通信・交通・事務上に手違いを起させる。ラジオなどで地名を聞いても，理解することができないことがある。文化の発達に伴い，この問題の解決の必要が切実に感じられる。

6 印刷上

地名にむずかしい漢字があるために，使用度の少ない活字

を数多く備えなければならないし、活字を拾うためにも手数がかかり、印刷能率の向上に支障をきたしている。

7 むすび

以上のようなわけで、全国の地名の中には、書き表わし方をできるだけ早く改善する必要があるものが多い。とりあえず、こんどの合併によって新しく決定される市町村名について、この点につきじゅうぶんの考慮を払われることが適當であると考えます。

【問】 当用漢字表にない字の地名を書き表わすのに、新しい略字を採用してよろしいでしょうか。

【答】 今まで使われてきている書き方はしかたがないとして、新しく地名をきめるときには、地名の呼び名や書き方をやさしくすることの努力をすべきだと思います。今までの地名にしても、名まえや漢字による書き方をもとのままにしておいて、世間に通用しないような略字やまぎらわしい略字を正式に認めるようなことは避けたいと思います。

5 学術用語の整理について

【問】 学術用語がやさしくなったそうですが、どういう発表があったのでしょうか。なお、その仕事の経過をもお知らせください。

【答】 当用漢字表の「まえがき」に添えた「使用上の注意事項」の第8項に、

専門用語については、この表を基準として、整理することが望ましい。

とあります。この要請に応じて、昭和22年、当時の学術研究会

議に学術文献調査特別委員会学術用語制定科会が生まれ、それから昭和 24 年、文部省に学術用語調査会が設けられました。さらに翌 25 年、これを学術奨励審議会学術用語分科審議会の事業として、現在、なおその仕事を続けています。

この仕事は、自然科学・人文科学の各部門にわたって、各学会の協力のうえで、当用漢字・現代かなづかいによって、わかりやすい学術用語・専門用語を制定しようとするものですが、この仕事については、昭和 6 年 1 月の内閣訓令・同告示で公布された薬品名の標準用語をはじめ、その後、引きつづき発表された各種（金属類・鉱物類及土石類・燃料・油脂・塗料及顔料・電気関係）の標準用語集（資源局刊）と、さらにこの仕事が企画院・技術院に移ってからも、その委嘱を受けた当時の全日本科学技術団体連合会の数年にわたる努力が続けられてきたことが、この仕事の基礎づけとなっていることを付記しておきます。

さて今日までのところ、次の 5 部門の用語集が決定して、29 年 3 月、文部大臣に「学術用語の制定について」の答申がおこなわれ、ついで 7 月、次官会議申合せによって、今後、各省庁で使用する専門用語は、これを基準として統一するよう努めることになりました。たとえば「楕円」は「だ円」または「長円」として、「起重機」は「クレーン」とするなど。くわしいことは次の本でみてください。

学術用語集	数 学 編	文部省（昭和 29 年 3 月刊）
	物理学編	〃 （ 〃 ）
	動物学編	〃 （ 〃 ）
	土木工学編	〃 （ 〃 ）
	採鉱や金学編	〃 （ 〃 ）

6 公文用語の改善について

【問】 公文用語の改善の仕事の由来と、その現在の進行状態を知らせてください。

【答】 公文用語の改善の仕事は、大正8年4月に、文部省内の公用文を口語体に改める旨の次官通達を出したことに始まって、大正15年6月には、内閣訓令をもって「法令形式ノ改善ニ関スル件」を公布するにいたりましたが、当時はまだじゅうぶんその成果をあげることにはできませんでした。戦後、昭和21年4月、新憲法の口語体の草案が発表されたことを契機として、同月、次官会議の決定で

今後、各官庁における文書及び新たに制定（全文改正を含む。）する法令の文体・用語・用字・句読点等は、今回発表された憲法改正草案の例にならうこととし、できるだけその平易化につとめること。

ということになり、それから国語審議会の建議などによって、一貫して公用文の用語・用字をやさしくする作業が進められました。そして最近では昭和29年11月、法制局次長の通達「法令用語の改正の方針」および「法令用語改正要領」によって、法令用語が、いっそう、やさしいことばに言い換えられることになりました。たとえば

「鎖鑰・鑰匙」は「かぎ」に、また「堰堤」は「ダム」というふうに。

参考のため、その全文を次に掲げておきます。

法制局総発第89号

昭和29年11月25日

(各省事務次官) 殿

法制局次長 林 修 三

法令用語の改善については、本年 10 月 7 日事務次官会議で、国語審議会の「法令用語改善についての建議」の趣旨をおおむね妥当とし、支障のない限り国語審議会の作成した「法令用語改正例」に準拠する方針を申し合わせたが、当局でその実施要領を検討した結果、今後次の方針によって実施することとしたから、御了知願いたい。

法令用語の改正の方針

- 1 国語審議会の作成した「法令用語改正例」のうち、別紙改正要領に記載したものは、法律については第 20 回国会に提案するものから、政令については 12 月 1 日以降の閣議に提案するものから実施することとし、別紙改正要領に記載していないものは、今後検討の上漸次実施する予定であるが、その場合は、改めて実施の期日を定める。
- 2 実施の方法としては、新たに法律又は政令を制定する場合は、必らず別紙改正要領によるものとし、既存の法律又は政令を改正する場合において、改正が法令の相当な部分にわたるとき、改正の部分のみに改善すべき用語があるとき、その他大きい支障なしに別紙改正要領よにることができると認められるときは、これによるものとする。

法令用語改正要領 (29年11月内閣法制局)

第1 同 音 語

(A) 次のものは、一般に用いられるものだけを残し、一般的でないものは、今後他の表現を考える。

(遺 棄
委 棄 (用いない。)

(会 議
開 議 (用いない。たとえば「会議を開く」とする。)

(開 示
戒 示 (用いない。)

(看 守
監 守 (用いない。)

(技 官
技 監 (用いない。)

(原 価
減 価 (用いない。たとえば「減損額」とする。)

(不 正
不 整 (用いない。)

(B) 双方ともよく用いられてまぎれやすい次のものは、そのうちの一方または双方を一定の形にいいかえて用いる。

(解 任
改 任→改めて任ずる、交代

(看 護
監 護→監督保護

(看 守
管 守→保管

(干 渉
管 掌→つかさどる

(管 理
監 理→監督管理

起 因
基 因→もとづく、基く

(規 定
規 程→規 則

広 告
公 告→公 示

(厚 生
更 正→訂正、修正
更 生→再建、再起

(詐 欺
詐 偽→偽 り

(商 標
証 票→証明、証片、証紙
証 標→徴票、しるし
証 憑→証 拠

(正 規
成 規→所 定

(調整
調製→作成

(表決
評決→議決

(報償
報奨→奨励

(法令
法例→準拠法令, 法令の適用関係

(保佐人
補佐人→補助者, 補助人

(C) 次のものは, 統一して用いる。

改定) 改定

改訂) 干渉

干渉) 干渉

関与) 関与

干預) 干預

規制) 規制

規正) 規正

規律) 規律

規整) 規整

規律) 規律

紀律) 紀律

經理) 經理

計理) 計理

交代) 交代

交代) 交代

作成) 作成

参酌) 参酌

主管者) 主管者

主幹者) 主幹者

招集) 招集

招集) 招集

消却) 消却

銷却) 銷却

償却) 償却

状況) 状況

情況) 情況

(常況→常の状況)

侵害) 侵害

浸害) 浸害

提示) 提示, 示す

呈示) 呈示

提出) 提出

提出) 提出

呈出) 呈出

定年) 定年

停年) 停年

統括) 統括

統轄) 統轄

配布) 配布

配付) 配付

(配賦→割当)

破棄) 破棄

破毀) 破毀

表 示) 表 示
 標 示) 表 示
 総 括) 総 括
 総 轄) 総 括
 和 解) 和 解
 和 諧) 和 解

(D) 同音語でも、意味のまぎれるおそれのない、下記のようなものは、そのまま用い

る。
 継 続) 継 続
 係 属) 係 属
 広 告) 広 告
 抗 告) 抗 告
 債 券) 債 券
 債 権) 債 権
 傷 害) 傷 害
 障 害) 障 害

第2 似た意味のことば

次のことばは、統一して用いる。

改 定) 改 定
 改 訂) 改 定
 交 代) 交 代
 更 代) 交 代
 交 迭) 交 代
 左 の) 次 の
 次 の) 次 の

趣 意) 趣 旨
 旨 趣) 趣 旨
 趣 旨) 趣 旨
 正当な理由) 正当な理由
 正当な事由) 正当な理由
 証 拠) 証 拠
 証 徴) 証 拠
 証 憑) 証 拠
 証 憑) 証 拠

第3 意味の通じにくい、むずかしいことば

(A) 次のことばは、表現が簡単すぎてわかりにくいから、一般に通じやすい表現に改める。
 医 籍→医師名簿
 勸 解→和解勧告、和解をす

すめる
 監 護→監督保護
 毀 棄→損壊又は廃棄
 漁 撈→水産動植物の採捕
 誹 毀→名誉損傷
 蚕 蛹→蚕のさなぎ

臨 検→立入検査

(B) 次のことばは、似た意味の漢字を重ね合わせてしいてむずかしく作られているからそれぞれわかりやすい日常語に改める。

遺 脱→(判断を～)し忘れる

違 背→違 反

開 陳→述べる

勸 奨→すすめる

希 求→こいねがう

享 受→受ける

具 有→有する

枝 条→枝

思 料→考える

遵 守→守 る

尽 了→終 る

成 造→作 る

送 致→送る, 送付

藏 匿→かくまう

脱 漏→も れ

盜 取→盜 む

房 室→室, へや

申 述→述べる, 申立

論 示→示す, さとす

擁 壁→かこい

(以下は、当用漢字表にはずれた漢字を用いたことば。)

隱 蔽→隠す

湮 滅→なくする, 隠滅

汚 穢→よごれ

拐 引→かどわかす

灰 燼→灰

開 披→開 く

扞 止→(土砂～)止め, 防止

毀 壞→そこなう

欺罔, 欺瞞→だます

狹 隘→狭 い

驚 愕→驚 く

掘 鑿→掘 る

懈 怠→怠 り

喧騒→騒がしい, やかましい

戸 扉→戸

溝 渠→み ぞ

誤 謬→誤 り

鎖鑰, 鑰匙→かぎ

遮 断→とめる

鬚 髥→ひ げ

燒 燬→焼 く

牆 壁→しきり

塵 埃→ほこり

塵 芥→ご み

齟 齬→くい違い

隊 伍→隊

堆 積→積 る

治 癒→な おる

禱 祀→祈

紊 乱→乱 す

憫 諒→あわれむ

編綴→とじる， とじ合わせる

包 囊→包 み

抹 消→消す， 消除

踰 越→越える

誘 拐→かどわかし

湧 出→わき出る

宥 恕→ゆるす

壅 塞→ふさぐ

檻 樓→ぼ ろ

漏泄， 漏洩→漏らす

歪 曲→ゆがめる

(C) 次のことばは，わかりやすい外来語に改める。

堰 堤→ダ ム

汽 鐘→ボイラー

空気槽→空気タンク

骨 牌→かるた類

酒 精→アルコール

檣 頭→マストトップ

船 渠→ドック

端 舟→ボート

油 槽→油タンク

(D) その他，次のような漢語の使用は，できるだけ避けてそれぞれ他のわかりやすい表現に改める。

威 嚇 (用いない。)

閱 歴→経 歴

永 期→長 期

解 止 (用いない。)

加 功 (用いない。)

行 用→行 使

事 由 (用いない。)

疾 病→病 気

召 喚→呼出し

成丁者→成年者

窃 用→盗 用

代務者→代行者

通 事→通訳人

売得金→売却代金， 売上金

配 賦→割 当

版 図→領 域

没取する→国庫に帰属させる

満限に達する→満了する

輸 納→提 出

第4 当用漢字表・同音訓表にはずれた漢字を用いたことば

(A) かな書きにしても誤解のおこらない次のことばはかなで書く。この場合かなの部分に傍点をつけることはやめる。

恐 喝→きょうかつ

強 姦→ごうかん

芥 溜→ごみため

昏 醉→こんすい

屠 殺→とさつ

賭 博→とばく

煉 瓦→れんが

猥 褻→わいせつ

毘 嚢→わ な

賄 賂→わいろ

庫 裏→く り

煙 草→たばこ

諮 る→はかる

以 て→もって

此 →こ の

之 →こ れ

其 →そ の

為 →た め

等(ら)→ら

かな書きにする際、単語の一部分だけをかなに改める方法は、できるだけ避ける。

あつ旋→あっせん

と 殺→とさつ

ただし、漢字を用いた方がわかりよい場合は、この限りでない。

あへん煙

あて名

ちんでん池

ほうろう鉄器

(B) 次のものは、当用漢字表同音訓表にはずれた部分を、それぞれ一定の他の漢字に改めて書く。

慰藉料→慰謝料

苑 地→園 地

外 廓→外 郭

吃 水→喫 水

饗 応→供 応

魚 艙→魚 倉

繫 留→係 留

繫 船→係 船

繫 属→係 属

闕 席→欠 席

交叉点→交差点

扣 除→控 除

雇 傭→雇 用

弘 報→広 報

撒水管→散水管

醇 化→純 化

障 碍→障 害

侵 蝕→侵 食
 訊 問→尋 問
 洗 滌→洗 淨
 疏 明→疎 明
 定繫港→定係港
 碇 泊→停 泊
 顛 覆→転 覆
 破 毀→破 棄
 蕃 殖→繁 殖
 拋 棄→放 棄
 輔 助→補 助
 緬 羊→綿 羊
 落 磐→落 盤
 剩 す→余 す

(C) 次のものは、それぞれ他の一定のことばにいいかえる。

印 顆→印形，印
 淫 行→みだらな性行為
 曳 船→ひき船
 捺 印→押 印
 穩 婆→助産婦
 瑕 疵→きず，欠陥
 牙 保→周 旋
 陷 穽→落とし穴
 涵 養→養成，育成
 毀 損→損 傷
 羈 束→拘 束

義 捐→救援，援助
 救 恤→救 援
 橋 梁→橋、
 牽 連→関 連
 股 分→持 分
 鑿 井→井戸掘り
 卸 任→解 任
 首 魁→主謀者
 竣 功→完 成
 傷 痕→傷 病
 塵芥焼却場→ごみ焼き場，ご
 み焼却場

神 祠→ほこら
 蔬 菜→野 菜
 稠 密→周 密
 貼 布→はりつける
 牴 触→ふれる，抵触
 堤 塘→堤
 填 補→うめる
 顛 末→始末，事の経過
 売 淫→売 春
 播 種→種まき
 彼此移用→相互移用
 彼此流用→相互流用
 七 首→あいくち
 封 緘→封
 瘋癲者→精神病患者
 俘 虜→捕 虜
 辺陬の地，僻地→へんぴな土

地

輸 贏→勝 敗
 烙 印→焼 印
 鄰 佑→隣 人
 鯢 →つんぼ
 狼 狽→ろうばい, あわてる
 (その他今後用いないもの)
 溢 水
 瘡 癩者
 河 津
 潸 濯
 膠 沙
 出 捐
 鍼 盤
 僭 潜

梳 理 攀 越

(D) 当用漢字表にない漢字を用いた専門用語等であって、他にいいかえることばがなく、しかもかなで書くと理解することができないと認められるようなものについては、その漢字をそのまま用いてこれにふりがなをつける。

砒 素
 蘭
 蛾
 禁 錮

第5 当用漢字表にあっても、かなで書くもの

虞 れ) おそれ
 恐 れ)
 且 つ→か つ
 従って(接統詞)→したがって
 但 し→ただし

但 書→ただし書
 外 →ほ か
 又 →ま た
 因 る→よ る

7 新字体について

新字体の権威

【問】 新しい字体は正式なものですか。

【答】 正式なものです。すなわち国語審議会で審議決定して建議したものが政府に採択されて、昭和 24 年 4 月 28 日に、内閣訓令同告示として公布されたものです。

旧 字 体 に つ い て

【問】 わたしたち（父母）とこどもとで、よく新旧の字体でゆきちがいが起ります。旧字体ではまちがいでしょうか。

【答】 旧字体も漢字として「まちがい」ではありません。ただ、新旧字体の「ちがい」があるわけです。

この「ちがい」と「まちがい」との区別を知って、おたがいに新旧字体を了解することがたいせつだと思います。

それにしても、この次の時代には新字体のほうが一般に行われるはずですから、おとうさん・おかあさんも、なるべく新字体を使うようにしてください。新字体のほうがひじょうにやさしいのです。たとえば次のように。

やさしい新字体の例

旧字体	新字体	旧字体	新字体
體	体	廳	庁
縣	県	圓	円
聲	声	亂	乱
醫	医	廣	広
傳	伝	竊	窃
學	学	癡	痴

「式」と「弌」

【問】 「式」と「弌」は、どちらが正しいですか。

【答】 漢字としては、本来「式」なのですが、通俗に「弌」の形も行われてきました。それは「式」の字とまちがいやすいことをさけるというような気もちもあったことと思います。新字体では、その一般に行われてきた形を、あらためて正字と認めたのです。それで、これからの常用文字としては「弌」の形を標準と認めて「式」の形は旧字体として取り扱うことになりました。

「海」の字体

【問】 「海」などは、みな「母」のテンテンがボウになったはずなのに、ここに添えた新聞の切りぬきのように、まだテンテンになっているのがあります。わたしの思いちがいでしょうか。

【答】 新字体では「母」はもとのまま、すなわち、テンテンです。その他は、すべて一筆に書く略字体になりました。その類の全部を次にあげておきます

毎	海	梅	悔	侮	敏	繁	毒
---	---	---	---	---	---	---	---

お示しの新聞の「海」の例は、旧字体の形が残っているのです。

「總・聰」と「総・聡」

【問】 当用漢字および人名用漢字で、次の字はどちらが正しいですか。

總 総 聰 聡

【答】 「總」は当用漢字字体表で「総」となりました。これは、従来一般に通用したものを、これから書く新字体として正式に認められたものです。したがって「總」は旧字体ということになりましたが、旧字体としての正字として生きています。

人名用漢字の「聡」も、上の「総」に準じて、元来の「聰」を聡と書くことになっていますが、これもやはり旧字体としては正字として生きているわけです。

「灯」の字について

【問】 「灯」は「燈」のかわりにつかいますか。以前、官報の告示では「燈」でしたが。

【答】 大新聞では「灯」を「燈」の代字として使うようになっていきます。これは、国語審議会の審議報告によったものです。（6ページ参照）公文書、教科書の類では、まだ正式に認められておりません。

略字について

【問】 文部省としては略字を認めていますか。

【答】 いわゆる新字体、略字といわれるものは、当用漢字字体表によって正字と認められたものですから、その意味では略字ではありません。しかし一般に用いられている略字を絶対に認めないということはむりでしょう。「燈」の代りに「灯」の字体を用いることなども、公式の場合には妥当ではありませんが、特に必要の

あるばあい、または、ごく私的な文書に略字として用いることは禁止されているわけではありません。一般にどの字でも世間に用いられているものをまったく否定するということとはできません。

「急」の字体

【問】 「急」の字の「ヨ」の中の「一」は、つきぬけるのが正しいか、つきぬけないのが正しいか、教えてください。

新聞には、大小の活字で両方の形があり、それを教材として用いるときに困ります。

【答】 「急」の字の「ヨ」は、字原的には「𠂔」のほうが原形に近いのですが、書道のほうでは古くから「ヨ」に書いてきました。

その書き方に同調して、活字のほうでも、これから新しくつくるときには「急」の形にしようということになったのが新字体です。その形が一般化するまでには時間をかけなければなりません。ですが、できるだけこれに協力してほしいという考えです。

教育の上では、「急」を基準として、当分の間は「急」でも「急」と同じ字だということを臨機に付説して教えていくというのが、おそらく現状に即した妥当な行き方だろうと思います。

し ん に ゅ う

【問】 シンニョウのたて画の部分は、これからはまっすぐに書くのですか。もとどおりにゆすって書いてはいけないですか。

【答】 しんにゅうは、活字体で点が一つになっただけで（しん>しん）筆写体には関係がありません。それで、もとどおり「しん」でよいわけです。

書き取りの採点について

【問】 書き取りのばあい、答案に新旧両字体が出てくるばあいがありますが、旧字体は全部誤りとすべきでしょうか。

【答】 書き取りをする前には、社会的に新旧字体が混用されている現段階においては、念のため、「新字体で書くこと。」ということに注意しておいて、その上で旧字体を書いたものは×としてよいと思います。

ただし作文などでは必ずしも×としないで、注意のしるしをつけてやり、おいおいに新字体を身につけるように指導することがたいせつだと思います。

8 筆順について

筆順のきまりについて

【問】 筆順にはきまりがあるものですか。

【答】 ある字について、それを正しく、そしてなるべく早く美しく書くことを目指して、昔の人が努力してきた経験の集積としてたしかに大体の基準があります。それが普通に筆順と呼ばれるものですが、それに従って書けば、自然に正しく、早く、美しく書く筋道を行くことになります。

その点、たとえば「田」の字は、外側の四角をさきに書いてあとから中の「十」を書いてもよく、また中の「十」をさきに書いて、あとから外側の四角を書いてよいというわけのものではありません。

ただ一つ注意すべきことは、ある少数の字には筆順が二つ（ごくまれには二つ以上）あることです。これはどちらも正しい筆順であって、そのうちの一つを誤りだとはいえません。これも「ちがい」であって「まちがい」ではないのです（25 ページ 参照）

そのうえ、新字体によって、これまでの伝統的な筆順だけではまかないきれないものがありますから、その点に注意すれば、あとはこれまでの筆順によってよいのです。

「必」の筆順

【問】 「必」の字の筆順を教えてください。

【答】 「必」の筆順は、古来の伝統としては次の二つがあります（かい書および行書として）。

(1) ソ し い 、 (2) ノ し ゝ い 、

次の二つは新しく考えられたものです。子供などには(3)が自然でしょうが、筆づかいの上からは(4)が自然です。

(3) 心 ノ (4) ノ し 、 ノ 、

9 現代かなづかいについて

長音の「う」

【問】 大多数の長音は「う」で表わすのに、少数の語だけ「お」を使うので、その使い分けがたいへんむずかしいです。それでは旧かなづかいを知らなければ新かなづかいが書けないではありませんか。

【答】 「大」などを「おう」としないで「おお」と書くのは、旧か

なづかいが「おほ」であるからというわけではなく、その発音が長音でなくて（オオ）であるからという認定のもとにそう書くことになったのですが、実際にはその発音の区別がたやすくつかないので、現代かなづかいにおける一つの悩みになっていることは事実です。しかし、その類の語は数が少なく、かつ漢字に隠れることが多いので、日常の用にはあまり不便がありません。長音とまぎらわしい語は次の 20 語ぐらいですから、教師としてはこれだけを覚えておけばよいわけです。

おおい（多い）	とお（十）
おおきい（大きい）	とおい（遠い）
おおう（覆う）	とおる（通る）
おおかみ（狼）	とおり（次の <u>とおり</u> ）
おおせ（仰せ）	いきどおる（憤る）
おおむね（概ね）	とどこおる（滞る）
こおり（氷・郡）	ほお（頬・朴）
こおる（凍る）	ほのお（炎）
こおろぎ（虫の名）	もよおす（催す）

助 詞 の 「は」

【問】 わたしはことし小学一年のこどもの親ですが、こくご読本に「わたくしは」

とあるのを

「わたくしわ」

としてほしいと思います。当局のお考えはいかがですか。

【答】 助詞の「は・へ・を」は「わ・え・お」とすると、あまり急激な改革のように感じられて、新かなづかい全体の実行にさしさ

わりがあるようでしたから、それだけはもとのままになったのです。将来、世論が熟して「わ・え・お」がよいということになるまでは一般には、現行のきまりに従っていくべきです。

「会津」「国府津」の「津」のかなづかい

【問】 「国語問題問答」第2集(20ページ)に、固有名物の新かなづかいについて出ている中に

会 津 あいづ 国府津 こうづ

とありますが、わたしは、今日では「津」は死語と考えますので

会 津 あいず 国府津 こうず

という一語と認めて、その「津」も「ず」のかなが書きたいと思います。

【答】 鉄道駅名のかながきのしかたについては、昭和22年に、運輸省と建設省地理調査部と、文部省との三者会議の結果、問題の「津」のつく地名・駅名についても、これに意味があると認め、かつ、ふりがなの意識があると考えて「づ」とすることになりました。「こうづ」も「やいづ」もその例の中にはいっています。

10 表記法上の諸問題

送りがなについて

【問】 送りがなについて、文部省か国語審議会できまったものがありますか。

【答】 送りがなについては、昭和21年3月に、文部省国語調査室

編の「送りがなの使い方」を文部省から出しました。その後は、それを基本として、少しずつ加除した規則を立てて教科書、公用文などに使ってきています。「文部省刊行物表記の基準」（後に「国語の書き表わし方」として刊行）などを御覧下さい。

【問】 次のような送りがなのしかたは、どちらが正しいですか。

戸締り	戸締	限り	限
答え	答	受け取る	受取る
受け取り書	受取書		

【答】 「戸締り」「限り」「答え」などのように書くことを原則として、そのうち「答」のように書き方が固定しているようなものはそれに従います。

教科書、公用文などでは、「受け取る」など、動詞として文章の中に書くばあいには送り、名詞は「受取書」などの慣用の書き方に従っています。

くぎり符号について

【問】 「お早う。」とかっこの中にマルをつけるがよいか。それとも「お早う」でよいか。

【答】 原則としては「お早う。」のほうがよいでしょう。そのうえで個人的な好みで「お早う」とだけにしておくこともありましょう。その点、どちらにしても文法上の誤りではありませんが、昭和 21 年 3 月に出た文部省国語調査室の「くぎり符号の使ひ方」によれば「お早う。」とします。

くりかえし符号について

【問】 「々」は、どう使ったらよろしいか。

【答】 「々」は、古くは「毎日々々」のようにも使ったものですが、近來は「点々」というふうに、上の一字だけにきかせる使い方が勢力を得るようになりました。現在の教科書では「点々」だけに用いていて、「毎日々々」などには避けている傾向です。

くの字符号の使い方

【問】 くりかえし符号のくの字点「〜」（印刷上やむを得ず横にする）は使ってよろしいか。どこからくり返すか。常識的に使うか。謡の本などには2行くらいの文をくり返しています。

【答】 「〜」の用法は、活字を用いるようになってからは、だいに退化していく傾向にあります。昔ふうに使えば「〜の〆〜」などにも使いますが、現在、教科書ではほとんど使わず、使ってもせいぜい「るゝ〜」などのところです。

外 来 語 の 表 記 法

【問】 外来語の書き方が決まりましたか。

【答】 昭和 29 年 3 月、国語審議会の総会に「外来語の表記」案が報告されましたが、なお慎重を期することとして建議するまでにはいたりませんでした。しかし、この案の「趣意がひろく社会に普及し、一般に実行されることが望ましい」旨を添えて発表され

ました。これは、国語シリーズ「外来語の表記」に収めてあります。

かたかなの用法について

【問】 かたかなを、当用漢字以外の漢字のかわりに書いてもよいですか。近来、新聞でよく見うけます。

【答】 昭和 22 年度発行の文部省の国語教科書では、かたかなは原則として外国の地名人名、外国語、外来語ならびに物音や動物の鳴き声に使うことになっていました。

ただし、近来、新聞などでは、もう少しかたかなの使い方が広がっていますので、いわばかたかなの用法の問題が新たに起ってきているわけです。が、まだ決定的な結論は出ていません。

11 標準語の問題

問題のあり場所

【問】 標準語の問題はどうなっていますか。

【答】 標準語の問題は、国語白書にもありますように、なかなか広範囲にわたる、むずかしい問題であります。

国語審議会では、さきに標準語部会を設けてその審議にあたっていました。昭和 29 年 3 月の総会に、その 2 年にわたる審議結果の報告がありました。そして、これを次期の国語審議会に送付して、その審議の基礎的資料としての活用を託することになりました。

標準語の問題には、話しことばと書きことばとの両面にわたり、文法、用語、発音などの上に、いろいろな問題があります。たとえば、

- (1) 「くださいませ」と「くださいませ」の使い方
- (2) 「感じる」と「感ずる」の使い方
- (3) 「を終わります」といってもよいかどうか。
- (4) 「むりからぬ」か「むりならぬ」か。
- (5) 「^{はっそく}発足する」か「^{はっそく}発足する」か。
- (6) 「ほお」と「ほほ」の問題。
- (7) 「はえ」か「はい」か。

などの問題があります。

「うお」と「さかな」

【問】 わたくしどもは、なんでも「魚類」は「さかな」と呼んでいましたが、「うお」と「さかな」を使い分けているむきもあります。どちらが正しいでしょうか。

【答】 「うお」は魚類の総称で、「さかな」は「副食物としてのうお」という意味に使ったのがもとです。そしてその使い方が現在でも広く各地に行われているのですが、東京では概してその区別がなく、なんでも「さかな」一本でまかなっているようです。ことばの立場からいえば、もとのように使い分けをするのが望ましいことですが、これを強制することも困難な点があります。

「じょうろ」か「じょろ」か

【問】 「如露」は「じょろ」ですか、「じょうろ」ですか。こどもの持っている辞典には「じょろ」とありますが、わたしたちも、

また生徒たちも、ひとりも「じょろ」といっているものはありません。みんな「じょうろ」といっています。

【答】 「じょうろ」は古く「如雨露」と書いていますから、その発音も「ジョーロ」であったと思われます。その「如雨露」を略して「如露」と書くようになり、それを読んで「じょろ」ということばもできました。

ところで「じょうろ」はもと、ポルトガルからの舶来品であつたらしく、その名もポルトガル語の jorro から出ていると考えられています。

さて、現代の標準語としてはどうかということになりますが、その点、国語審議会でもまだ決定していません。そこで、その決定があるまでは、現代の東京語でいっているように「ジョーロ」といっておけばよいと思います。

ただし、これを「ジョロ」といっても「まちがい」だとはいえないと思います。

「水郷」の読み方

【問】 「水郷」の読み方について、漢和辞典には「スイキョウ」とありますが、ラジオでは「スイゴウ」といっています。今日ではどちらを正しいとすべきでしょうか。

【答】 「水郷」の読み方は、漢和字典には漢文読みふうに「スイキョウ」となっていますが、実際には「スイゴウ」といって、それが現代一般の通用語になっています。

12 敬語の問題

「これからの敬語」

【問】 「これからの敬語」の全文を知らせてください。

【答】 巻末に付録しておきました。

女子の「〇〇くん」

【問】 教室で男子を呼ぶばあい、女子でさえ近ごろ「〇〇くん」というのが多く、女教員も男子を「〇〇くん」と呼ぶのが一般のようになりました。しかも高学年まで男女共学の今日、上へ行ってもこの言い方をつづけていくのではないかと思われます。それでいいかおたずねします。

【答】 お問い合わせの件は、さきに「これからの敬語」を審議するときにも問題になりまして、けっきょくはしばらく様子を見ようということになったのですが、そのさい是認説の要旨は、

(1) 第三者として聞くとき、それが男子のことになっているのか女子のことをいっているのかすぐわかる。

この利点は、男女共学の場合が長く続くのにつれて増大する。

(2) この言い方は、これまでの「言者の立場」からする言い分けを、対象の性別に転移させるものであって、まったく新しい語法の発生である。これは、将来の日本語として大いに尊重して考慮すべきものである。

というのでした。

13 ローマ字の問題

新しい訓令について

【問】 ローマ字のつづり方がいよいよ決まったそうですが、その経過と公文の全部を示してください。

【答】 ローマ字のつづり方については、明治以来の懸案として持ちこされた標準式（ヘボン式）と日本式との2式の統一を目ざして昭和5年、文部省に設けられた臨時ローマ字調査会の審議の結果に基き、昭和12年に内閣訓令によるいわゆる訓令式が公布されましたが、戦後、さらに国語審議会で審議され、その結果、昭和29年12月に内閣訓令・同告示として次のように公布されました。

内閣訓令第一号

各 官 庁

ローマ字のつづり方の実施について

国語を書き表わす場合に用いるローマ字のつづり方については、昭和12年9月21日内閣訓令第三号をもつてその統一を図り、漸次これが実行を期したのであるが、その後、再びいくつかの方式が並び行われるようになり、官庁等の事務処理、一般社会生活、また教育・学術のうえにおいて、多くの不便があった。これを統一し、単一化することは、事務能率を高め、教育の効果をあげ、学術の進歩を図るうえに資するところが少なくないと信ずる。

よつて政府は、今回国語審議会の建議の趣旨を採択して、よりどころとすべきローマ字のつづり方を、本日、内閣告示第一

号をもつて告示した。今後、各官庁において、ローマ字で国語を書き表わす場合には、このつづり方によるとともに、広く各方面に、この使用を勧めて、その制定の趣旨が徹底するように努めることを希望する。

なお、昭和 12 年 9 月 21 日内閣訓令第三号は、廃止する。

昭和 29 年 12 月 9 日

内閣総理大臣 吉 田 茂

内閣告示第一号

国語を書き表わす場合に用いるローマ字のつづり方を次のように定める。

昭和 29 年 12 月 9 日

内閣総理大臣 吉 田 茂

ローマ字のつづり方

ま え が き

- 1 一般に国語を書き表わす場合は、第 1 表に掲げたつづり方によるものとする。
- 2 国際的關係その他従来の慣例をにわかに改めがたい事情にある場合に限り、第 2 表に掲げたつづり方によつてもさしつかえない。
- 3 前二項のいずれの場合においても、おおむねそえがきを適用する。

第1表 [() は重出を示す。]

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	(i)	yu	(e)	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	(i)	(u)	(e)	(o)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	(zi)	(zu)	de	do	(zya)	(zyu)	(zyo)
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

第2表

sha	shi	shu	sho	
		tsu		
cha	chi	chu	cho	
		fu		
ja	ji	ju	jo	
di	du	dya	dýu	dyo
kwa				
gwa				
				wo

そ え が き

前表に定めたもののほか、おおむね次の各項による。

- 1 はねる音「ン」はすべて n と書く。
- 2 はねる音を表わす n と次にくる母音字または y とを切り離す必要がある場合には、n の次に ' を入れる。
- 3 つまる音は、最初の子音字を重ねて表わす。
- 4 長音は母音字の上に ˆ をつけて表わす。なお、大文字の場合は母音字を並べてもよい。
- 5 特殊音の書き表わし方は自由とする。
- 6 文の書きはじめ、および固有名詞は語頭を大文字で書く。なお固有名詞以外の名詞の語頭を大文字で書いてもよい。

第2部 資

料（付録）

第 1

国 語 審 議 会

国 語 問 題 要 領

昭 和 2 5 年 6 月

文 部 省

ま え が き

昭和 24 年 6 月、文部省設置法に基いて新しく設置された国語審議會は、文部大臣の諮問に応ずることを主とした従来の国語審議會とは異なり、民主的・自主的に国語政策の立案審議を進めることになった。そこで、具体的な諸問題に着手するにあたって、新しい国語審議會の性格と方針を明確にするとともに国語の現状と国語における問題となるべき点がどこにあるかを客観的に見わたす必要を痛感したので、国語白書作成の部会を設けて、その原案を作成した。この部会の成案は「国語問題要領」として、25 年 6 月 12 日第 7 回総会で正式に議決され、文部大臣に報告された。

本書は、今後、国語問題の解決が広く各方面の協力により推進されることを念願して、これを公表し印刷に付したものである。

昭和 25 年 6 月

文部省調査普及局国語課長 原 敏 夫

目 次

1	国語審議会の性格と任務	49
2	国語の現状の分析	50
	(1) 国語を用いるもの	50
	(2) 国語の教育	50
	(3) 用 語	51
	(4) 発 音	51
	(5) 語法および文体	52
	(6) 表記法	52
3	国語問題の歴史的展望	54
	(1) 国字改良の意見とその実行	54
	(2) 国語政策の実施	54
	(3) 口語文と話しことば	55
4	国語に関する諸機関	56
5	国語問題審議の基準	57

1 国語審議会の性格と任務

ここに国語審議会というのは、文部省設置法（昭和 24 年 6 月法律第 146 号）によって新たに設けられた機関で、各方面からの推薦に基いた委員で組織し、国語の改善に關することがら、国語教育の振興に關することがら、およびローマ字に關することがら（昭和 25 年 4 月追加）について調査審議し、民主的な方法で国語政策を立案するとともに、必要に応じこれを政府に建議するのがその任務である。

およそ言語は、歴史の裏づけをもった社会慣習であるから、法令などによって拘束したからといって、ただちに改善できるものではない。とはいえ、現在のわが国語は、歴史的事情によってあまりにも複雑化し、一面、国語教育が不徹底であるために、国語に対する知識や注意がゆきわたらず、それが国民の社会生活や文化の発達にとってさまたげとなっている点も少なくない。したがって、国語の現状に照して将来を見とおし、その改善に積極的な努力を試みることはきわめて必要である。国語審議会は、これらの努力に対し、適正な方向を与え、これを助成して、国語の改善、国語教育の振興をはかるという使命をもつものである。

そのためには、国民の言語生活の実情を調査し、広い見地に立って問題の所在を突きとめ、政策の基準を立て、あわせてその実現の方法を考える必要がある。政策の実施はもとより政府の責任であるが、国語審議会としては、その審議にあたって独断に陥ることを避け、一般世論の傾向を推察するとともに、各方面の意見に耳を傾け、できるだけ実現可能な具体的方策を練り、建議にあたっては、たとえば試験期間をおくことが必要ならばその考慮をも加えて、政策に弾力性をもたせることも考えなければならない。

2 国語の現状の分析

わが国は古来、諸外国の文化を摂取してきたが、それに伴って、日本語とは系統のちがった言語・文字に接する機会が多かった。そして古くは中国、近くはヨーロッパ・アメリカなどの言語・文字を採り入れた結果、ついに今日の複雑多様な国語が形成された。こうして国語問題は、わが国の文化政策としてどうしても避けることのできない重大問題になってきたのである。

(1) 国語を用いるもの

言語は、書きことばと話しことばとを問わず、これを用いるものと離れては存在しない。したがって国語を用いるものがよくその機能を理解し、それを効果的にしようと心がけることは、国語を改善するための根本ともなるべきものである。すべて言語は思想伝達の手段であるから、正確簡明な表現をとることが必要であり、一方、社会生活を円滑にする上からも、いたずらに相手の感情を刺激したり、相手を疎隔したりするような表現は避けなければならない。言語はまた、それ自身一つの芸術品となるべき性質をもつものであるから、その方向にまで高めてゆく用意も必要である。しかし今のところ、そういう自覚が一般にゆきわたっていないとはみとめられない。

(2) 国語の教育

国語改善の責任はその半ばを教育に求めなければならず、国語政策の実施もまた教育の力によるものが多い。したがって、国語を改善するには、国語教育の任務・目的および内容を明らかにする必要があると同時に、国語行政の系統が確立されなければならない。元来、教育は、過去および現在の文化を受けついでゆく使

命のほかに、その発展として、将来の文化を創造するという使命をもになるものである。自然、国語教育もまたこの二つの使命が遂行されるように計画されなければならないはずであるが、それはまだ満足できるまでになっていない。

(3) 用 語

社会生活が複雑になるにつれて、国語の用語もきわめて豊富となり複雑となってきた、そこに新語や外来語の問題が発生する。元来、新語の増加、外来語の吸収は、社会現象の一つとして避けることのできないものであるが、それがゆきすぎた結果は、さまざまな混乱をひきおこしている。たとえば、

- (i) 一般にわかりにくい漢語はしだいに減ってきたが、同じ発音で意味のちがうものがまだ行われており、その上、漢字を組み合わせた耳なれないことばがさかんに作られている。「写調」「車券」などはこの例である。
- (ii) 学術上の専門語についても、同じ概念をあらわす語が、分野によってまちまちのため、一般の理解を困難にしている場合がある。コンスタントを常数（数学・物理）、恒数（化学）、定数（工学）、不変数（経済）などとしているのはこの例である。
- (iii) 会話や印刷物を通じて、必要以上に外国語が用いられる一方、すでに常識的に通用している外国語をむりに漢語に訳しかえて、一般の理解をさまたげている場合もある。

(4) 発 音

国語の音韻は、現在では教育の力によって、いわゆる標準音がかなり広く通用するようになっているが、しかし、たとえば、

- (i) 国語の中には、アクセントによって意味を区別する単語が多いにもかかわらず、地方によっては「ハシ」「カキ」のように高低が逆になっている場合がある。

(d) 一般に国語の音韻についての関心が薄く、そのために(3)の(i)に述べたように、同じ発音で意味のちがうことばが数多くできて、実際生活上しばしば混乱の種をまいている。なお発声法についての関心も薄く、その知識や訓練がはなはだしく不足している。

(5) 語法および文体

これは(3)の用語にも関係することであるが、敬語法があまりにも複雑であり、特に人に関する代名詞の種類の多いことは戦後しばしば問題になった。これは一面、社会生活の反映であると同時に、社会生活と言語とのずれに基くものであって、教育上重要問題の一つといわれる。

また、標準語は、これまで東京の教養ある社会のことばを取りあげるようにいわれてきたが、その標準にもあいまいな点がある。書きことばの場合に、文学語として用いられる口語文体は、ほぼ安定したとみとめてよいが、実用文の問題、話しことばとしての標準語や方言の問題、また、対話・講演・演劇・映画・放送などにわたる諸問題については、まだ考えなければならない点が多い。

(6) 表 記 法

国語の表記法はきわめて複雑である。

(i) 現在わが国で広く行われている文字は、漢字・ひらがな・カタカナ、およびローマ字の4種である。数字としては、漢字のほか、主としてアラビア数字、時にはローマ数字が用いられている。また科学の記号としてギリシア文字を用いることもあるが、これは特別な場合である。

(d) 国語の表記法としてもっとも広く行われているのは、漢字かなまじり文である。かなは、普通にはひらがなが用いられて

いる。

(イ) かたかなは、これまで漢字をまじえて公用文・学術論文などに用いられていたが、現在では、主として外来語や外国の固有名詞を書きあらわす場合と、擬声語などの場合とに用いられる。なお、意味を強めたり、見た目をきわだたせたりするために、かたかなを混用することもある。また、電信文にはかたかなが専用されているほか、国語表記の方法としてかたかなだけを採用しているものもある。

(ニ) ローマ字は、外国語表記のため、しばしば漢字かなまじり文の中に混用され、また駅名の標示や看板などにも用いられるが、一方、国語表記の方法としてローマ字だけを採用しているものもあり、義務教育期間中にはローマ字の学習や、ローマ字による教科指導も行われている。いま、一般に通用しているローマ字のつづりかたにも、いわゆる訓令式・日本式・標準式の3種がある。

(ホ) 漢字とかなとによる表記法は、一般に右縦書きであるが、左横書きも行われているし、また分ち書きを主張するものもある。

(ヘ) 送りがな・くぎり符号（句読点）などについても、人によって使いかたがまちまちになっている。

昭和23年(1948)に行われた読み書き能力調査委員会の調査によれば、文盲はわずか1.7%という少ない率であるが、今の社会生活に必要な能力をもっているとみとめられたのは、国民の6.2%にすぎず、その原因として、国語が複雑なこと、特に漢字のむずかしいことが指摘されている。また、昭和21年(1946)アメリカの教育使節団から提出された報告書の中にも、国語の表記法が複雑なために、文化の向上がさまたげられている事実に対し、強い関心が示されている。このように表記法が複雑であっては、タイプライタを用いて印刷したりする場合に、いちじるしく能率を害することも当然

で、これがまた、さまざまな国字改良論にとって根強いよりどころの一つとなっている。

ただ、いわゆる漢字制限が行わたてから、特に国字の問題が国語問題の中心になったように見られているが、これは、広く国語一般に関係するものとして考える必要があり、漢字を制限することも漢語と切りはなして考えるわけにはゆかない。

以上の簡単な分析によっても、国語・国字が複雑多様であり、また、混乱していることは明らかである。

3 国語問題の歴史的展望

(1) 国字改良の意見とその実行

近代になって国字のために発表された意見としては、慶応2年(1866)に前島密^{ひそか}が建白した漢字御廃止^の之義が最初であり、これが動機となってローマ字論やかな専用論が現われ、明治16年(1883)にはかなのくわいが作られた。今のカナモジカイ(大正9年, 1920—)の運動は、この考えかたの系統を引いたものである。

漢字の全廃は、現実の問題として実行が困難であるという理由から、別に漢字節減論が現れたのも明治初期のことである。福沢諭吉、矢野文雄などはその代表的な論者であり実行者であった。

ローマ字採用の意見は、明治2年(1869)南部義籌^{よしかず}の修国語論の主張に始まり、17年(1884)には羅馬字会^{ローマ}が作られ、後にローマ字ひろめ会(明治38年, 1905—)と日本ローマ字会(大正10年 1921—)とが設けられた。

このほか、明治初期以来、新しい文字を考案したものもかなりあるが、それは行われなかった。

(2) 国語政策の実施

政府は、早く国語問題の重要性をみとめ、明治35年(1902)文

部省に国語調査委員会を設けて、この問題の解決に着手した。さらに大正 10 年 (1921) には臨時国語調査会を設け、12 年 (1923) に常用漢字表、14 年 (1925) に仮名遣改定案を発表した。これとともに国語問題に対する社会の関心もしだいに高まり、特に昭和 6 年 (1931) には、以上の二つを修正して作った案を国定教科書に採用しようとして、はげしい反対にあい、社会的に大きな反響を呼んだ。

ついで昭和 9 年 (1934) には、国語審議会が文部大臣の国語改善に関する諮問機関として設けられ、昭和 17 年 (1942) には、この審議会の手で標準漢字表・新字音仮名遣表が発表されたが、一般に行われるようにはならなかった。

戦後になってこの審議会は、従来の国語改善に関する成績を検討して、昭和 21 年 (1946) には当用漢字表・現代かなづかいを決定し、別に義務教育のための当用漢字別表、当用漢字音訓表、つづいて当用漢字字体表を決定した。これらはすべて政府によって採択され、内閣訓令ならびに告示として公布された。そしてそれが、法令・公用文・教科書に実行される一方、一般の新聞・雑誌なども多くはこれと歩調を合わせている。なお、昭和 24 年 (1949) には、中国の地名・人名を現代の中国標準音によってかな書きにする案が発表された。

ローマ字についても、政府は、教育上・学術上または国際関係上そのつづり方統一の必要をみとめ、早く昭和 5 年 (1930) に臨時ローマ字調査会を設けてその審議に着手し、昭和 12 年 (1937) 内閣訓令としてその方式を発表した。

(3) 口語文と話しことば

書きことばを口語に近づけようとする、いわゆる言文一致の運動や標準語の問題も明治初年におこった。やがて言文一致は文芸作品と教科書とに実現され、今日の口語文にまで発展した。特に戦後、

日本国憲法が公布されてからは、官庁の文書もおいおい口語に改められるようになった。

いわゆる標準語は、義務教育に用いられる国語教科書や放送などを通じてしだいに全国にゆきわたってきたが、話しことばについては、社会生活の上からも、国語教育の上からも、従来その重要性があまりみとめられず、指導の点にも具体的な方策が確立されていない。

4 国語に関する諸機関

現在、主として国語問題に関係ある政府機関としては、国語審議会のほか、国立国語研究所および文部省調査普及局国語課などがある。

国立国語研究所は、国語および国民の言語生活に関する科学的調査研究を行い、国語の合理化にむかって確実な基礎をきずくために設けられたもので、現代の国語、国語の歴史的発達、国語教育、公衆に対する言語などの調査研究のほか、国語政策の立案に参考となる資料を作ることその事業の一つとなっている。

文部省調査普及局国語課は、国語審議会の事務を処理し、審議会が必要とする資料の収集整理などについて技術的援助を行うとともに、国語改善に関する政策について企画し、関係の政府機関ならびに民間各方面とも連絡してその普及にあたる。また、公用文の改善、ローマ字およびローマ字教育に関することがらを取り扱い、かねて国立国語研究所に関する事務をも処理している。

なお、国語の学術的研究は各大学の研究室などで行われ、国語の改善は民間各団体の手で推進されるなど、関係する範囲はきわめて広い。

5 国語問題審議の基準

以上に述べたような国語の現状と国語問題の歴史とから見て、新しい国語審議会がその任務をつくすためには、国語の理想的なありかたについて、たえず現実立脚しながら、慎重に考慮しなければならない。それについては、まず次のようなことが考えられる。

義務教育を容易にすることができるかどうか。国語の学習は義務教育の基礎であり、国語教育の目的は、国語による表現を確実にし、理解の能力を進め、社会生活にさしつかえないようにすることがある。国語を覚えるために、児童や生徒にむりな負担がかかることは避けなければならない。

一般の言語生活、特に文字の使用と理解とを能率化することができるかどうか。文化の向上が、少数のすぐれた人たちを必要とすると同時に、一般の水準を高めることももちろん必要であって、多くの人々が容易にまた正確に、理解したり話したり書いたりできるように方向づけなければならない。特にその方法は、あくまでも現実に即した、実行可能のものでなくてはならない。

公衆に対する言語として適用できるかどうか。公衆に対する言語は、新聞・公用文などのように文字によるものと、講演・放送などのように音声によるものとに分けられる、文字によるものについては、印刷などに関する諸問題を考えに入れることももちろんであり、字体のことも研究しなければならない。

文化を創造したり受けついたりするのに、どんな影響を与えるか。これまでの文化遺産を受けつぐ一方、創作の自由をもさまたげないためには、国語教育のありかたや国語改善の方針などについてたえず反省する必要がある。しかも、これは決して単独な問題でなく、前に述べた諸問題とたがいに関連させて適切な判断をくださなければならない。

国語審議会は、およそ以上のような諸条件のもとに、現在考えられる限りのいろいろな立場を、できるだけ客観的に取りあげて議題とし、それをまずそれぞれの部会で討議し、その結果を少数意見とともに総会に提出する。総会ではさらにそれを検討し、なお順次に新しい議題を決定してゆく。

会議は原則として公開であるが、必要に応じて懇談会のようなものを開くことも考えられる。議決の結果は、その実施を政府に建議するばかりでなく、広く世論に訴え、一般社会の協力による文化運動として強く推進してゆかねばならない。 (おわり)

第 2

こ れ か ら の 敬 語

昭和 27 年 5 月

文 部 省

国語審議会では、かねて敬語の使い方について審議していましたが、昭和 27 年 4 月 14 日、第 14 回総会で「これからの敬語」を議決し、これを文部大臣に建議しました。この小冊子はそれを印刷したものであります。

国語改善の実をあげるため、その趣旨が広く普及徹底するよう、各方面の協力を望むしだいであります。

昭和 27 年 5 月

文部省調査普及局国語課長 原 敏 夫

目 次

ま え が き	62
基 本 の 方 針	63
1 人 を さ す こ と ば	64
(1) 自 分 を さ す こ と ば	64
(2) 相 手 を さ す こ と ば	64
2 敬 称	64
3 「たち」と「ら」	65
4 「お」「ご」の整理	65
(1) つけてよい場合	65
(2) 省けば省ける場合	66
(3) 省くほうがよい場合	66
5 対 話 の 基 調	66
6 動 作 の こ と ば	67
7 形 容 詞 と 「で す」	67
8 あ い さ つ 語	67
9 学 校 用 語	68
10 新 聞 ・ ラ ジ オ の 用 語	68
11 皇 室 用 語	69
12 む す び	70

ま え が き

この小冊子は、日常の言語生活における最も身近な問題を取り上げて、これからはこうあるほうが望ましいと思われる形をまとめたものである。

これからの敬語についての問題は、もちろんこれに尽きるものではない。元来、敬語の問題は単なることばの上だけの問題でなく、実生活における作法と一体をなすものであるから、これからの敬語は、これからの新しい時代の生活に即した新しい作法の成長とともに、平明・簡素な新しい敬語法として健全な発達をとげることを望むしだいである。

基 本 の 方 針

1

これまでの敬語は、旧時代に発達したままで、必要以上に煩雑な点があった。これからの敬語は、その行きすぎをいましめ、誤用を正し、できるだけ平明・簡素にありたいものである。

2

これまでの敬語は、主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならない。

3

女性のことばでは、必要以上に敬語または美称が多く使われている（たとえば「お」のつけすぎなど）。この点、女性の反省・自覚によって、しだいに純化されることが望ましい。

4

奉仕の精神を取り違えて、不当に高い尊敬語や、不当に低い謙そん語を使うことが特に商業方面などに多かった。そういうことによって、しらずしらず自他の人格的尊厳を見うしなうことがあるのははなはだいしまむべきことである。この点において国民一般の自覚が望ましい。

1 人をさすことば

(1) 自分をさすことば

- 1) 「わたし」を標準の形とする。
- 2) 「わたくし」は、あらたまった場合の用語とする。
付記 女性の発音では「あたくし」「あたし」という形も認められるが、原則としては、男女を通じて「わたし」「わたくし」を標準の形とする。
- 3) 「ぼく」は男子学生の用語であるが、社会人となれば、あらためて「わたし」を使うように、教育上、注意をすること。
- 4) 「じぶん」を「わたし」の意味に使うことは避けたい。

(2) 相手をさすことば

- 1) 「あなた」を標準の形とする。
- 2) 手紙（公私とも）の用語として、これまで「貴殿」「貴下」などを使っているのも、これからは「あなた」で通用するようになりたい。
- 3) 「きみ」「ぼく」は、いわゆる「きみ・ぼく」の親しい間がらだけの用語として、一般には、標準の形である「わたし」「あなた」を使いたい。したがって「おれ」「おまえ」も、しだいに「わたし」「あなた」を使うようにしたい。

2 敬 称

- 1) 「さん」を標準の形とする。
- 2) 「さま（様）」は、あらたまった場合の形、また慣用語に見られるが、主として手紙のあて名に使う。
将来は、公用文の「殿」も「様」に統一されることが望ましい

3) 「氏」は書きことば用で、話しことば用には一般に「さん」を用いる。

4) 「くん (君)」は男子学生用語である。それに準じて若い人に対して用いられることもあるが、社会人としての対話には、原則として「さん」を用いる。

付記 議会用語の「某君」は特殊の慣用語である。

5) 職場用語として、たとえば「先生」「局長」「課長」「社長」「専務」などに「さん」をつけて呼ぶには及ばない(男女を通じて)

3 「たち」と「ら」

1) 「たち」は、たとえば「わたしたち」というふうに、現代語としては、自分のほうにつけてよい。

2) 「ら」は書きことばで、たとえば「A氏・B氏・C氏ら」というふうに、だれにも使ってよい。

4 「お」「ご」の整理

(1) つけてよい場合

1) 相手の物事を表わす「お」「ご」で、それを訳せば「あなたの」という意味になるような場合。たとえば、

お帽子は、どれでしょうか。

ご意見は、いかがですか。

2) 真に尊敬の意を表わす場合。たとえば、

先生のお話 先生のご出席

3) 慣用が固定している場合。たとえば、

おはよう おかず おたまじゃくし

ごはん ごらん ごくろうさま

おいでになる (すべて「お——になる」の型)

ごらんになる（すべて「ご——になる」の型）

- 4) 自分の物事ではあるが、相手の人に対する物事である関係上、それをつけることに慣用が固定している場合。たとえば、
お手紙（お返事・ご返事）をさしあげましたが
お願い お礼 ご遠慮
ご報告いたします

(2) 省けば省ける場合

女性のことばとしては「お」がつくが、男子のことばとしては省いていえるもの。たとえば、

〔お〕米 〔お〕菓子 〔お〕茶わん 〔お〕ひる

(3) 省くほうがよい場合

たとえば、

(お)チヨッキ (お)くつした (お)ビール

(ご)芳名 (ご)令息 (ご)父兄

(ご)調査された（これは「調査された」または「ご調査になった」が正しい。）

ご卒業された（これは「卒業された」または「ご卒業になった」が正しい。）

5 対 話 の 基 調

これからの対話の基調は「です・ます」体としたい。

付記 これは社会人としての一般的対話の基調を定めたものであって、講演の「であります」や、あらたまった場合の「ございます」など、そのほか親愛体としての「だ」調の使用を制限するものではない。

6 動作のことば

動詞の敬語法には、およそ三つの型がある。すなわち、

型 語例	I	II	III
書 く	書 かれる	お書きになる	(お書きあそばす)
受 け る	受けられる	お受けになる	(お受けあそばす)

第1の「れる」「られる」の型は、受け身の言い方とまぎらわしい欠点はあるが、すべての動詞に規則的につき、かつ簡単でもあるので、むしろ将来性があると認められる。

第2の「お——になる」の型を「お——になられる」という必要はない。

第3の型は、いわゆるあそばせことばであって、これからの平明・簡素な敬語としては、おいおいにすたれる形であろう。

7 形容詞と「です」

これまで久しく問題となっていた形容詞の結び方——たとえば、「大きいです」「小さいです」などは、平明・簡素な形として認めてよい。

8 あいさつ語

あいさつ語は、慣用語句として、きまった形のままでよい。たとえば、

(おはよう。
おはようございます。

(おやすみ。
おやすみなさい。
いただきます。
ごちそうさま。
(いってきます。
いってまいります。
いってらっしゃい。

9 学 校 用 語

- 1) 幼稚園から小・中・高校に至るまで、一般に女の先生のことばに「お」を使いすぎる傾向があるから、その点、注意すべきであろう。たとえば、

(お) 教室 (お) チョーク (お) つくえ
(お) こしかけ (お) 家事

- 2) 先生と生徒との対話にも、相互に「です・ます」体を原則とすることが望ましい。

付記 このことは、親愛体としての「だ」調の使用をさまたげるものではない。

- 3) 戦前、父母・先生に対する敬語がすべて「おっしゃった」「お——になった」の式であったのは少し行きすぎの感があった。戦後、反動的にすべて「言った」「何々した」の式で通すのもまた少し行きすぎであろう。その中庸を得たいものである。たとえば「きた」でなく「こられた」「みえた」など。

10 新聞・ラジオの用語

新聞・ラジオの用語として、いちばん問題になるのは、敬称のつけ方である。

それについて、

- 1) 一般に文章・用語がやさしくなり、それにしたがって敬称も「さん」が多く使われる傾向があるのは妥当である。
- 2) 政治的文章における「氏」の用法も妥当であるが、一面社会的記事において「翁・女史・くん・ちゃん」そのほかの敬称・愛称を、その時、その場、その人、その事による文体上の必要に応じて用いることは認めざるを得ない。
- 3) 犯罪容疑者に関する報道でも、刑が確定するまでは敬称をつけるのが理想的であるが、たとえば現行犯またはそれに準ずるものなどで、社会感情の許さないような場合に、適宜、これを省略することがあるのもやむを得ないと認められる。
- 4) 次のような場合には敬称をつけないでよい。

青山荘アパート（責任者甲野乙雄）

11 皇 室 用 語

これまで、皇室に関する敬語として、特別にむずかしい漢語が多く使われてきたが、これからは、普通のことばの範囲内で最上級の敬語を使うということに、昭和 22 年 8 月、当時の宮内当局と報道関係との間に基本的了解が成り立っていた。その具体的な用例は、たとえば、

「玉体・聖体」は「おからだ」

「天顔・龍顔^{りゅう}」は「お顔」

「宝算・聖寿」は「お年・ご年齢」

「叡慮^{えい}・聖旨^{しんきん}・宸襟^い・懿旨」は「おぼしめし・お考え」などの類である。その後、国会開会式における「勅語」は「おことば」となり、ご自称の「朕」は「わたくし」となったが、これを今日の報道上の用例について見ても、すでに第 6 項で述べた「れる・られる」の型または「お——になる」「ご——になる」の型をとって、

平明・簡素なこれからの敬語の目標を示している。

12 む す び

一般に、社会人としての対話は、相互に対等で、しかも敬意を含むべきである。

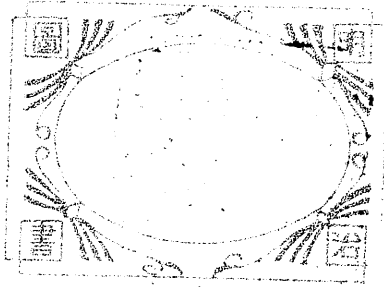
この点で、たとえば、公衆と公務員との間、または各種の職場における職員相互の間のことばづかいなども、すべて「です・ます」体を基調とした、やさしい、ていねいな形でありたい。

戦後、窓口のことばや警察職員のことばづかいなどが、すでにこの線に沿って実践されているが、これからも、いっそうその傾向が普遍化することが望ましい。

国語シリーズ 26

国語問題問答

第 3 集



MEJ 4069

昭和30年3月20日印刷 昭和30年3月30日発行

著 作 権
所 有

文 部 省

東京都中央区入船町3の3

発 行 者

藤 原 政 雄

東京都板橋区志村町1の1

印 刷 者

鈴 木 森 吉

(日興印刷株式会社)

東京都中央区入船町3丁目3番地

発 行 所

明 治 図 書 出 版 株 式 会 社

電話築地(55)4970 振替東京 151318

定 価 20 円